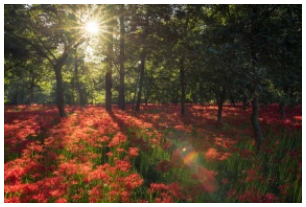
2024 年の秋分は 9 月 22 日。期間でいうと 9 月 22 日～10 月 7 日です。

この道や　行く人なしに　秋の暮れ　　松尾芭蕉
「秋の夕暮れ時にこの道を行くものは全くいない。道を行く私は何と寂しいことだ」
この句は芭蕉が 51 歳の時、大坂で行われた人生最後の句会で詠まれたと言われています。
この句会は芭蕉にとって人生最後の句会でした。
この句を詠んだ三日後に体調を崩し、約二週間後に亡くなります。

春分の日と同じく太陽が真東から出て真西に入り、昼と夜の長さがほぼ同じくなります。
秋分の日を中日とし前後 3 日間を合わせた 7 日間が秋のお彼岸です。

「お彼岸」は仏教の言葉で先祖供養の日とされます。
「暑さ寒さも彼岸まで」の彼岸にはお墓参りに行く風習があります。
仏教では、生死の海を渡って到達する悟りの世界を「彼岸」といい、
その反対側の私達がいる世界を「此岸（しがん)」といいます。
そして、彼岸は西に、此岸は東にあるとされており、
太陽が真東から昇って真西に沈む秋分と春分は、昼と夜の長さがほぼ等しくになることから、
彼岸と此岸の距離が最も近い日と考えられ、先祖を敬い、感謝を伝えることができる日として、
お墓参りに行ったり仏壇に手を合わせたりするなど、先祖の供養をする日となりました。

この時期の花に「彼岸花」があります。
赤く独特な雰囲気が目を引く「曼珠沙華（まんじゅしゃげ)」。
サンスクリット語で「天界に咲く花」という意味。
秋分の日の頃に鮮やかな赤色の花を 1 週間ほど咲かせ、やがて葉になり、冬そして春を経て枯れるというほかの植物とは異なる特徴をもっています。
もとは中国原産で、日本では墓地や田んぼの周り、あぜ道でよく見かける秋分の日を象徴する不思議な花。 曼珠沙華は、アルカロイド系の猛毒を持っています。
この毒を利用して、田畑を荒らすモグラやネズミから大切な先祖の墓や田んぼを守るために植えられたといわれています。



「彼岸花関東三大名所」
　　埼玉の巾着田、神奈川の日向薬師、近場の高座渋谷「常泉寺」
「巾着田（きんちゃくだ)」は清流、高麗川（こまがわ）に囲まれた
彼岸花の群生地として有名なスポットです。
開花シーズンには約 500 万本もの彼岸花が咲き、
辺り一面を美しい赤で彩ります。

「巾着田曼珠沙華公園」では日本最大級の彼岸花を楽しむ
フェスティバルも開催され、地元グルメや特産品の販売や
ステージイベントが行われます。
「花のお寺」として親しまれる「常泉寺」は、神奈川県大和市にあり
小田急電鉄高座渋谷駅から徒歩約 7 分です。

「かながわ花の名所１００選」にも選ばれており、
赤い彼岸花が約 1000 本、白い彼岸花が約 300 本咲いている
そうです。春のみつまたも有名です。

お彼岸には「お彼岸団子」と呼ばれ、白く丸めたお団子を積み重ねてお供えします。
一般的には、お彼岸の初日（彼岸入り）に供える団子を「入り団子」、
最終日（彼岸明け）に供える団子を「明け団子」と呼びます。

彼岸の中日である秋分の日には、おはぎを食べる風習があります。
その由来は諸説ありますが、
一つは、小豆の赤には邪気を払う効果があるとして先祖に
供えられたのがきっかけというもの。
秋の植物である萩。おはぎの名前は、これに由来しています。

萩の花が、小豆の粒によく似ている様子から「御萩餅」と呼ばれていました。
そのうちに餅が取り払われ、「おはぎ」とひらがなで表現される現在の形になったそうです。
春分の日に食べられる「ぼたもち」。おはぎと大変よく似ていますが、
ぼたもちは漢字で書くと、「牡丹餅」。
春に咲く牡丹の花が、小豆と形がよく似ていることが起源だとされています。
ぼたもちもおはぎ同様、仏壇へのお供え物として春のお彼岸に登場する行事食。
おはぎとぼたもちの違いについては、季節の違いをはじめ、さまざまな説が存在します。

例えば、餅の大きさに関する違い。おはぎに比べ、ぼたもちのほうが大きいとされており、
牡丹の花の大きさをぼたもちで表現しているといわれています。
このほかにも、こしあんとつぶあんの違いとする説や使用する米の違い
とする説などさまざまありますが、明確にこれだというものはありません。
確実にいえることは、春はぼたもち、秋はおはぎと呼ばれるということです。
一説には小豆を牡丹の花に見立てたことから、「ぼたんもち」と
呼ばれていたのが「ぼたもち」に変わったとも言われています。

一方のおはぎは、秋のお彼岸に食べられていました。
秋の七草のひとつである萩の花と小豆の形状が似ているため、
「おはぎもち」と呼ばれていたのが「おはぎ」に変わったとされています。
もともとは形状やあんこの種類も異なるものでした。
ぼたもちは牡丹の花のように大きな丸い形で作られ、おはぎは萩の花のように細長い俵型のような形状で作られていたとされています。
外側を覆うあんこもぼたもちはこしあん、おはぎは粒あんという違いがありました。
秋に収穫したばかりの小豆は皮が柔らかく、そのまま皮も潰して食べられるため、
秋のおはぎには粒あんが使われていました。
しかし、ぼたもちを作る春には皮が固くなってしまっているため、
皮を取り除いたこしあんが使われていたのです。
現在では、小豆の品種改良や保存技術が発達した結果、季節を問わず、粒あんが作れるようになったため、季節によるあんこの違いがなくなりました。
米の種類で分けて、主にもち米で作られているのは「ぼたもち」、
主にうるち米を使っているのは「おはぎ」と呼んでいる地域もあり、
あんこで覆ったものは「ぼたもち」、きな粉をまぶしたものは「おはぎ」と呼ぶ地域もあります。

2024 年の白露(はくろ)は 9 月 7 日。
二十四節気では、夏の暑さが落ち着く「処暑（しょしょ）」の次に白露を迎え、昼夜の長さがほぼ同じになる「秋分」へと移り変わります。

白露もこぼさぬ萩のうねり哉（しらつゆもこぼさぬはぎのうねりかな）　　松尾芭蕉
　萩がこぼすものは萩の花ときまっているが、その花はもちろん、花に置いた白露さえこぼすことなく揺らめいていることだ、という意。
元禄 6 年秋。杉風（杉山杉風）の別邸採茶庵の邸に秋萩を移植した際に芭蕉が詠んだ句
杉風を称える挨拶句であろうと言われています。

　白露の時期には「中秋の名月」や「彼岸の入り」など、季節の行事があります。
中秋の名月とは、旧暦 8 月 15 日の夜空に昇る月のこと。空気が澄んでいる秋は、夜の月が美しく見えます。そのため人々は古来より、中秋の名月に秋の収穫物を供えて豊作を感謝し、健康を願ってきました。月に似た丸い形の団子を積み上げるのは収穫の感謝や健康長寿の願いを天へ届けるためです。
供えた団子を食べることで月の力を得て、健康長寿の願いが叶うと考えていました。
お供えするものは地域によって違いますが、まるい団子を三方（さんぽう）という神様へのお供えをのせる台の上に 15 個積み上げます。月見団子の意味は諸説ありますが、丸い形が満月を連想し、月に収穫の感謝を表していると言われています。
他には秋に収穫した里芋などの野菜や果物、ススキを飾ります。
ススキは稲穂に似た姿から、月の神様が宿るとされています。

「彼岸の入り」とは、秋の彼岸の初日のことです。
彼岸では、墓参りをしたりお供ものをしたりして先祖を供養します。
彼岸は春と秋の年 2 回あり、秋の彼岸は秋分の日を中心とした 7 日間とされています。
秋の彼岸に、餅をあんこで包んだ「おはぎ」をお供えする人は多いでしょう。
おはぎは、夏から秋にかけて開花する萩の花を模して、俵形に作られます。
また、あんこには粒あんを使用することも特徴です。

＜重陽の節句＞
9 月 9 日は五節句の 1 つである「重陽の節句」です。
最近はあまりなじみがない節句ですが、旧暦を使用していた頃までは五節句を締めくくる最後の行事として盛んに行われていました。旧暦の 9 月 9 日は現在の 10 月中旬ごろあたり、菊の花が見ごろを迎える時期です。
「菊の節句」とも呼ばれ菊酒を飲んだり、栗ご飯を食べたりして無病息災や長寿を願います。
菊酒とは菊の花を漬け込んで香りを移した日本酒のこと。

白露の時期は収穫を祈る秋祭りなど、全国各地で神事があります。
「岸和田だんじり祭」（大阪府）は、毎年その勇ましい様子がニュースにもなる秋祭り。
最大重量 4t を超える「だんじり」を 400～1000 人の男衆が 2 本の綱で曳く、勇壮無双な姿は迫力満点。特に、フルスピードで曳行コースを曲がる「やりまわし」は、祭り一番の見所。
だんじりは唐破風の大屋根・小屋根が二段でコマが四つの山車（だし）のことで、西日本地域特有の呼称です。
約 300 年の歴史と伝統を誇る岸和田だんじり祭も、元々は五穀豊穣を祈る稲荷祭がその始まりだと言われています。

だんじりの魅力は大迫力のやりまわしだけではありません。
①だんじりの彫り物は、歌舞伎・人形浄瑠璃・講談などでもとり上げられているような、歴史的な出来事や物語がモチーフになっています。特に「太閤記」「難波戦記」などが人気の高い彫り物です。漆塗りや金箔などを使わず欅の木目を活かした、人物、馬、霊獣、そして花鳥ものから唐草文様など、実にさまざまな彫刻を目にすることができます。
②「灯入れ曳行（えいこう）」
夜になると、200 個以上の提灯を飾り付けただんじりが子ども達に曳かれます。
昼の激しいだんじりとは異なり、灯入れ曳行は優美さと静寂が魅力です。
③「だんじり囃子」は、だんじりの上で篠笛・小太鼓・鉦（かね）・大太鼓で囃す音楽のことで、リズムは、だんじりの動きに合わせて変わります。だんじりが猛スピードで走る時のリズムは「きざみ」、やりまわしで足並みを揃えるときの少しスピードを抑えたリズムは「半刻み」など、曳き方によってリズムが変わります。

＜だんじりの彫り物＞　　＜灯入れ曳行＞

夏休みも残すところあとわずか。2024 年の『処暑』は 8 月 22 日です。
「処」は落ち着くという意味で、厳しい残暑もいよいよ和らぎ、朝夕は涼しさも感じられる頃。
心地よい虫の声にも秋の気配が漂います。
＜処暑の時期を示した有名な一句＞

あかあかと日は難面（つれなく）も秋の風　　松尾芭蕉

＜句意＞
（もう季節は秋になったというのに残暑は厳しく）太陽は明るく容赦なく照りつけているが、
（さすがに吹いてくる風には秋らしい気配が感じられる）秋の風である。
『おくのほそ道』の旅の途中の 7 月 17 日（太陽暦 8 月 31 日）に、金沢での句会で披露された句です。芭蕉が名残惜しまれながらも、旅の出発をする時に読んだ句です。
お世話になった人への一句！

兼六園内にある句碑

成学寺境内にある句碑。

まだまだ日中は暑い日も多いですが、朝夕には、時折、夏の終わりを感じさせる涼しい風が吹きはじめ、ある日ふと、夜風に、コオロギや鈴虫の声が混じっているのに気がつきます。
行楽に出かければ、野山にススキや桔梗などの「秋の七草」を目にし、景色も少しずつ、秋に向かっていることを感じるでしょう。

秋といえば紅葉のイメージですが、開花する花も多く、たくさんの美しい植物が見ごろを迎えます。「春の七草」に対して、秋にも七草があります。
秋は、萩、薄（すすき）、女郎花（おみなえし）、桔梗、藤袴（ふじばかま）、撫子、葛です。
和歌や日本の美術品などにもよく登場します。
秋の七草は、歌人・山上憶良が『万葉集』（巻八）で詠んだ 7 種の草花にちなんでいます。

『秋の野に 咲きたる花を指折り（およびおり）かき数ふれば 七種（ななくさ）の花』
『萩の花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴 朝顔（あさがお）の花』

萩（はぎ）：秋を代表する花。「おはぎ」の由来にも。
すすき：お月見には欠かせない植物。茅（かや）ともいう。
葛（くず）：古くから食用・薬用として親しまれている植物。
撫子（なでしこ）：可憐なピンクの花。「大和撫子」。
女郎花（おみなえし）：女性らしく美しく華やかな黄色い花。
藤袴（ふじばかま）：絶滅の恐れがある植物。藤色の花。
桔梗（ききょう）：絶滅の恐れがあると危ぶまれる植物。

「二百十日(にひゃくとおか)」に警戒すべし、

立春から数えて二百十日は例年、9 月 1 日前後になります。
台風が襲来する日と、丁度、稲が開花する時期とが重なるため、昔から農家の厄日とされ、二百十日や二百二十日の頃には、風の神を鎮めるために「風祭(かざまつり)」という行事が行われてきました。地方によっては、風祭を「風鎮祭(ふうちんさい)」や「とうせんぼう」などと呼ぶこともあります。

１.富山で催される「おわら風の盆」は毎年多くの観光客も訪れる人気の祭りです。
9 月 1 日から 3 日まで、三味線、太鼓、胡弓の独特な調べにのって、編みがさを目深にかぶった男女の踊り手が「越中おわら節」を舞います。北陸に秋の訪れを告げるものです。

おわら風の盆

大曲の花火

吉田の火祭り

２.「大曲の花火」は、例年 8 月最終土曜日に秋田県大仙市で行われる花火大会で、
60 万人以上が集まる「日本三大花火大会」の一つとしても知られています。
多くの花火大会と異なり、大曲の花火は競技大会の要素がある点が魅力です。数々の匠の技や練り上げられた最新の技術をお披露目する大会なので、毎年目新しい花火に遭遇することができます。大会のラストを締めくくる「大会提供花火」は総数約 2,400 発が音楽とともに打ち上がり、壮大な夜空の芸術を創り上げます。

３.富士山を背景に赤く燃える大松明
毎年 8 月 26 日、27 日に行われる「鎮火大祭」は、「吉田の火祭り」と呼ばれ、北口本宮冨士浅間神社と諏訪神社のお祭りで、富士登山の山じまいの祭りとして知られています。
初日の夕方には御旅所と呼ばれる場所に神輿が到着すると同時に、金鳥居から浅間神社までの沿道に設置された大松明が点火され、富士山を背景に赤く燃え上がる大松明の光景が広がります。高さ 3 メートル、直径 90 センチの大松明が 100 本以上も並ぶ光景は圧巻。約 2 キロにもわたる上吉田の表通りに 1 本の火の帯が現れたかのような、美しい景色を楽しめます。
野外で開催されるイベントですが、神事のため雨などの悪天候でも基本は中止になりません。

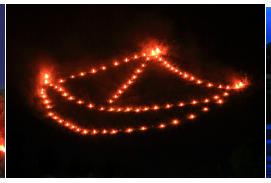
2024 年の立秋は 8 月 7 日です。
夏の暑さが少しずつ和らぎ、初秋の訪れを感じさせる時季、それが立秋です。
立秋の頃には、日本において複数の季節行事が執り行われています。

その一つが「七夕」です。
七夕は一般的には 7 月 7 日に行われますが、もともとは旧暦の 7 月 15 日ごろに行われていたため、お盆と関係が深く、現在でもお盆と同様に月遅れの 8 月 7 日に七夕を行う地域はあります。
特に名が知られているのは「仙台七夕まつり」で、2024 年は 8 月 6 日～8 日に開催されます。

　また、この時期はお盆の準備も始まり、先祖の霊を迎えるための様々な儀式や風習が各地で行われています。7 月をお盆とする地域もありますが、全国的には 8 月のお盆が一般的で 8 月 13 日～16 日と立秋の期間に当たり、お墓参りやお盆祭りなど、行事は全国各地でさまざま催されます。
盆棚をしつらえて供物を供え、盆提灯を飾ったり、迎え火や送り火などを行うところが多いです。
京都の「五山の送り火」や長崎の「精霊（しょうろう）流し」も送り火のひとつです。
五山の送り火とは、京都市内を囲む 5 つの山に、火で文字や模様を浮かび上がらせる行事です。
西から順に、鳥居形・左大文字・船形・妙法・大文字が並びます。
五山の送り火が終わるとお盆の行事も終わり、先祖の霊もあの世に帰っていきます。

鳥居形

左大文字


船形

妙法

大文字

　立秋を迎えると、日本の食文化においても季節に応じた変化がみられます。
この時期の代表的な風習として「土用の丑の日」にうなぎを食べることがあります。
うなぎは滋養強壮に良いとされており、暑中疲れを癒やし、これから訪れる秋への体調管理を意味します。
　また、秋刀魚や栗などの秋の味覚が徐々に市場に出回り始める時期でもあります。
立秋を迎えると自然界にも目に見える変化が表れます。セミの鳴き声も次第に下火になり、夜には虫の音が秋らしさを演出します。木々の葉も徐々に色づき始め、菊の花が咲くころには秋本番を迎える準備が始まっています。

8 月 19 日は「俳句の日」です。1991 年に制定されました。「は（8）い（1）く（9）」の語呂合わせ。
＜奥の細道を代表する名句のひとつ＞

荒海や佐渡によこたふ天河（あらうみやさどによこたうあまのがわ）
　夜の日本海に浮かぶ佐渡島の黒々とした島影。
　その手前でうねる日本海の荒波。二つの対比的な事象を超越するかのように、天空をまたいで天の川が横たわっている。

＜記念切手＞

　芭蕉ならではの、スケールの大きな描写。この句を詠んだとされるのは出雲崎に宿した七夕も近い 7 月 4 日（新暦 8 月 18 日）です。

2024 年の大暑は 7 月 22 日です。大暑（たいしょ）とは一年の中で最も暑い頃とされ、セミが鳴きはじめ、サルスベリが咲く頃ともされています。
体力を保つために鰻を食べる「土用の丑」や、各地でのお祭り、花火大会もこの期間にたくさん行われ、夏の風物詩が目白押しです。

「奥の細道」の中の一句、山形県立石寺（りっしゃくじ）で 7 月 13 日に詠んだ句。
『閑かさや　岩にしみ入る　蝉の声』　　松尾芭蕉
（読み方：しずかさや　いわにしみいる　せみのこえ）
「なんと静かなことだろう。鳴いている蝉の声もまるで岩にしみこんでいくようだ。」という意味。梅雨明けが待ち遠しい季節の俳句です。

東北の短い夏。一斉に弾けるように各地でお祭りが賑やかに始まります。

【8 月 1 日　弘前ねぷた祭り】

三国志や水滸伝などの武者絵等を題材とした大小約 80 台の勇壮華麗なねぷたが弘前市を練り歩く夏まつりです。
弘前のねぷたまつりの見どころのひとつは、この祭りばやしの一隊に加わる津軽情っ張り大太鼓。
笛・太鼓のお囃子（はやし）につれて「ヤーヤド、ヤーヤド」の掛声で気勢をあげて大勢が山車を引きます。
弘前のねぷたは、平面の絵画でありながら、飛び出さんばかりの迫力で描かれ、表が武者や英雄、裏は美人画や水墨画の、静と動が表裏一体で表現されています。
山車は大型の燈籠で、扇ねぷたが主ですが、人形型の組ねぷたも見られます。

【8 月 1 日　盛岡さんさ祭り】

日本一の太鼓パレードとして知られています。
色鮮やかな衣装に身を包み、力強いリズムで太鼓を叩きながら華やかな踊りを披露。
大迫力の太鼓の音と笛に、人々の熱気を感じられる圧巻の群舞を楽しめます。

【8 月 2 日　青森ねぶた祭り】

笛や太鼓のお囃子に合わせて舞う踊り子たちのことを「跳人（ハネト）」と呼び、「ラッセラー」という独特な掛け声で祭りの雰囲気を盛り上げます。
ねぶたのデザインは毎年異なり歴史や伝説を題材にした巨大なねぶた灯籠が町を練り歩く様子は圧巻。

【8 月 3 日　秋田竿燈祭り】

260 年以上の歴史を持つ国重要無形民俗文化財
夏の邪気払いや五穀豊穣を祈ってはじまったとのこと。
竿燈の上げ手たちは、頭や肩、腰で竿燈を支え、
その華麗な技術は一見の価値があります。
提灯を米俵に、全体を稲穂に見立てた竿灯は、
大きなもので全長 10m、重さ 50kg を超えます。
熟練の職人たちが繰り出す技のひとつひとつが、
観客たちを引き込み、お祭りのボルテージを引き上げていきます。

【8 月 5 日　山形花笠祭り】

祭りは、華やかに彩られた蔵王大権現の山車を先頭に、「ヤッショ、マカショ」の掛け声と勇壮な花笠太鼓を伴奏に、たくさんの踊り手が花笠音頭にあわせて踊りながら市内の目抜き通りをパレードします。
あでやかな衣装に身を包んだ、1 万人を超える踊り手の、躍動感あふれるダイナミックな踊りと、山形の花である『紅花』をあしらった笠の波がうねり、咲きこぼれます。

【8 月 6 日　仙台七夕祭り】

「仙台七夕まつり」は豊作を田の神に祈るためにはじまったとされるお祭りで、戦後少しずつその規模を拡大してきました。
華やかな七夕飾りが市内を彩り、特にアーケード街に並ぶ色とりどりの飾りは息をのむ美しさです。
飾りは長さ 5～10 メートルに及ぶ、同じデザインのないくす玉をつけた吹き流しが主体で全て和紙や紙で、毎年新しく一つ一つ手作りされたものです。

梅雨が明けて本格的な夏になる「小暑」。2024 年の「小暑」は 7 月 6 日です。
本格的な暑さが到来する前の頃。まだ多くの地方では、暑さより梅雨明けが待ち遠しい時期ですが 7 月中旬を過ぎると南から北に向け一気に夏が駆け上がります。
＜小暑の時期を示した有名な一句＞

夏草や　兵（つわもの）どもが　ゆめの跡（あと）　松尾芭蕉

かつては合戦に夢をかけた地、今は夏草が生い茂るだけ、という意味です。
「夏草」はこの時期の代表的な季語で、夏に生い茂る抜いても抜いても生えてくる雑草。
この俳句は、芭蕉が平泉で最初に訪れた高館で詠んだ句と言われています。
この高館は、平泉で自害したと言われる源義経の居館があった場所です。

高館からの景色

毛越寺にある句碑

＜小暑には全国でたくさんの祭りや神事があります。＞

①・祇園祭（ぎおんまつり）7 月 1 日～31 日
京都の夏の風物詩、祇園・八坂神社の祭礼が「祇園祭」。平安時代の 869 年に無病息災を祈る儀式が行われたのが起源。7 月 1 日から 1 か月間行われ、最大の見せ場は、17 日の先祭りと 24 日の後祭り。釘を一本も使わずに大工が縄のみで組み立てた山鉾 33 基が、それぞれ御神体を祀り京の町をめぐります。
②・博多祇園山笠（はかたぎおんやまかさ）7 月 1 日～15 日
福岡県の博多では勇ましい祇園祭が行われます。「山笠（やまかさ）」と呼ばれる山車を「おっしょい」と掛け声をかけながら担ぎ、街中を駆け抜けます。
③・那智の火祭（なちのひまつり）7 月 14 日
和歌山県の那智勝浦町にある熊野那智大社から、年に一度、里帰りをする熊野の神々を重さ 50 kgもある大松明（おおたいまつ）でお迎えする祭りです。
④・入谷朝顔まつり（朝顔市）（7 月 6 日～8 日）
明治初期、東京・入谷にいた十数件の植木屋がアサガオの栽培を始め、品種改良などによって見事な花を咲かせたことが評判になり、朝顔まつりが行われるようになった。
⑤・東京・浅草寺のほおずき市（7 月 9 日～10 日）
観音様の「功徳日」にほおずきを販売する縁日。ほおずきは縁起物で「鬼灯」と書き、赤い色は夏負けの厄除けになると言われ、招福の願いが込められている。浅草寺では、7 月 10 日が一年で最大の功徳日にあたり、御利益があると言われています。

二十四節気・季節の変化を楽しみませんか。

二十四節気は春夏秋冬を 6 つに、1 年を 24 等分したもので、それぞれに季節の変化を表現する名がつけられています。私たちは季節の移ろいの中で暮らしていますが、二十四節気はまさに現代にも通じる暮らしの知恵です。忙しい毎日だったり、同じような毎日を過ごしていても自然の変化を意識するだけで心が落ち着いたり、視界が鮮やかになったりします。
日本の伝統を楽しむことで、日々の生活に彩りを添えることができるでしょう。

6 月は国民の祝日がない、一年を通しても珍しい月です。

6 月 21 日は「夏至（げし）」。　一年のなかで最も昼の長い日です。

2024 年 6 月 21 日の横浜の昼の時間は約 14 時間 34 分です。

日の出：4 時 26 分　　日の入り：19 時 00 分

「夏至」の日は「日の出が最も早く、日の入りが最も遅い日」、だと思っていませんか？
実は横浜の日の出が最も早い日は、夏至より 1 週間ほど早く、日の入が最も遅い日は
夏至より 1 週間ほどあとになります。

＜日本の夏至祭り＞といえば、二見興玉神社（ふたみおきたまじんじゃ／三重県伊勢市）で行われる「夏至祭」が有名です。伊勢神宮に祀られる天照大御神を讃える行事であり、夏至の日に二見浦で夫婦岩の間から昇る朝日を浴びながら禊を行います。

＜夏至に食べられるもの＞としては氷に見立てた水無月（みなづき）という和菓子。
神事「夏越の祓（なごしのはらえ）」に合わせて京都を中心に食べられるもので
一年の折り返し地点となる 6 月 30 日にを食べ残り半年の無病息災を願うそうです。
三角形の白いういろうに、ふっくら炊いた小豆をのせた伝統的な歳時菓子です。
小豆には厄除けの意味があり、三角形の形は暑気を払う氷をあらわしています。

＜季節の有名俳句＞も沢山あります。

『田一枚植えて立ち去る柳かな』　松尾芭蕉

芭蕉は旅をしながら歌を詠んだ西行法師にあこがれていたそうで、この句の解釈のひとつです。
西行法師もひとやすみをするため立ち寄ったとされる柳の木を見た感動から、「柳を見て西行法師に思いを馳せていたら農民たちが田んぼに稲を植え終わっていた。田植えが終わり、私も農民たちも立ち去ったので残るのは柳のみだ」という解釈です。

奥の細道の名勝地、芦野の里　遊行柳（ゆぎょう）

＜芦野の里の田植え祭り＞